

白話小説の版画をめぐる二、三のことども

大塚 秀高

はじめに

筆者は過去も現在も小説研究の基礎は版本研究にあると考えている。それゆえその出発点として『増補中国通俗小説書目』（汲古書院、一九八七年五月）を編著し、その中でそれ以前には知られていなかった小説についてもいくつか紹介した。その後、『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』、『金瓶梅』、『紅樓夢』に限ってはあがあるが、北京の首都師範大学周文業氏の肝煎りで開発された「版本數字化及計算機自動比対」ソフトにより、この方面の研究は飛躍的に進歩し、かつては夢にも思わなかった研究環境が整えられるにいたった。よって筆者は上記の五大小説以外を守備範囲とし、細々と版本研究を続けてきたが、現時点で振り返ってみると、その間に犯した過誤や思い違いも少なくはなかった。そのままにしておけば後世に禍根を残すことにな

らう。そこで、近年筆者が取り組んできた挿絵を通じての版本研究を総括するとともに、以前の研究の過誤等についても訂正を試みることにした。

一 「警世通言」の挿絵

馮夢龍が天啓四（一六二四）年に編集刊行した白話の短篇小説集である『警世通言』にはいくつかの版本があり、その四十篇からなる初期の版本はいずれも第一冊目に各篇半葉二面の挿絵を収めている。そうした版本の系統は大きく二つに分かれる。一つは、本文は原刻後印本を重刻し、挿絵はこれを模刻したと思われる版本の系統である。この系統を名古屋市蓬左文庫蔵本の封面に見える兼善堂の文字により兼善堂本系とよぶとき、兼善堂本系の版木は埋木改刻を重ねつつ複数の書肆の手をへてその後もたびたび印刷

されたようであるが、そのことについてはここでは述べない（なお、兼善堂本系の版本で最も初印に近いものは、封面が失われている東京大学東洋文化研究所倉石文庫蔵本である）。いま一つは、一部補刻と後修葉を混じえるものの、本文の大半については原刻本の版木によつていると思われ、大分県佐伯市教育委員会所蔵の佐伯文庫本と、その後継の三桂堂本からなる系統である。佐伯文庫本の挿絵も兼善堂本の挿絵と同様原刻本の挿絵を模刻したものらしいから、絵柄は兼善堂本と基本的に同一であるが、細部には細かな相違が存在している。では兼善堂本の挿絵と佐伯文庫本の挿絵ではいづれが原刻本のそれに近いのか。

まず両者の相違のうち目立つものを確認しておこう。兼善堂本の巻一表の挿絵には左上隅に「素明刊」と刻工名が見えるが、佐伯文庫本の挿絵にはそれがない。それゆえこれまででは刻工名がある兼善堂本が原刻本とみなされてきた。しかし兼善堂本の本文は佐伯文庫本が正字で記している文字を一部ではあるが簡筆字（略字）にしているし、眉批も佐伯文庫本に比べ少ない。しかも版心の巻数表示に本文、挿絵とも混乱があり、なおかつ両者の対応も乱れている。それゆえ本文、挿絵のいづれも原刻初印本のものとは認めがたい。筆者は、挿絵に見える「素明刊」の文字については原刻本にあったものをそのまま模刻したか、模刻者

が新たに彫り込んだ（素明が刻した）かのいずれかではないかとみているのだが、そのことは暫くおく。

巻六表の挿絵は豊楽楼から望む長江の眺めを描いているが、酒房の幟や壁の文字が異なっている。これに類する相違としては、巻十六表の糸屋の店先の看板が兼善堂本は黒くなつてゐる（文字を彫り残している）のに、佐伯文庫本には「絨線胭脂舖」と見える例や、巻十七裏の、いままさに門内に入ろうとしてゐる幟が兼善堂本では無地なのに、佐伯文庫本では「欽賜衣錦還郷」と書かれてゐる例が挙げられる。以上三者のうち後二者は、佐伯文庫本の挿絵が本来のものに近いことを示唆する。

巻九表の挿絵は酔つた李白が高力士に靴をはかせる場面を描くものであり、兼善堂本には高力士、靴とも見える。これに対し、佐伯文庫本には靴しか見えないが、高力士がいるはずのところは黒いしみのようなものが見える。同じ巻九裏は采石磯で李白が鯨（鯉にしか見えませんが）に乗つて昇天する絵柄であるが、こちらは天からの迎えが兼善堂本では旌節を持った仙童二人だけなのに、佐伯文庫本ではその背後に楽器を持った人物が四人描かれている。これは本文の「音楽前導」に対応するものであろう。兼善堂本のその部分にしみはないから、この部分については佐伯文庫本の挿絵が新たにこの四人を加えたか、兼善堂本が模刻に

際しその部分を省いたかのいずれかとなる。李白に靴を履かせる場面に高力士は欠かせないが、李白昇天の際の「音楽前導」はなくとも差し支えなかった。よつて巻九裏の挿絵については兼善堂本の画工(あるいは刻工)が手を抜いたとみたい。

巻十表の挿絵は燕子楼から盼盼が秋空を渡る鷹を見ている絵柄であるが、そこに付される七言二句の韻語は、両者で位置が異なっている。韻語といえは、他のすべての挿絵に添えられている韻語が巻二十二裏の挿絵に限って、兼善堂本、佐伯文庫本のいずれにもみえないのは不審である。その佐伯文庫本の挿絵には先の巻九表と同様版面にしみが見えるが、兼善堂本にはそうした痕跡がない。このほかでは、巻三十六表の趙知俱が皂角林大王の廟を焼き払う場面の挿絵の煙が、兼善堂本で黒煙、佐伯文庫本で白煙となっている点が目立つ。

以下ではこれまでに述べた諸点に鑑みつつ、兼善堂本、佐伯文庫本の挿絵の関係を考えたいのだが、その際に鍵となるのはやはり佐伯文庫本の挿絵の巻九表や巻二十二裏に見える黒いしみの成因であろう。

黒いしみが見えるということは、その部分の版木が不完全に削り落されているということの意味するのではない。下絵に何も描かれていなければ刻工は版木のその部分

を完全に削り取つたから、挿絵に黒いしみなど残るまい。加えて、模刻と否とに関わらず、巻九表の挿絵に高力士が描かれないことはありえない。もともと高力士を彫るつもりだったが彫り忘れたとか、何らかの事情で彫るのをやめたと考えるのは合理的でなからう。しからは佐伯文庫本の巻九表の挿絵の版木には本来高力士が彫られていたのだが、佐伯文庫本を刷る時点ではそれが不完全に削り落されていた(あるいはすり減っていた)ということになるのではあるまいか。では佐伯文庫本の当該の挿絵の版木は原刻本の版木だったのか、それとも兼善堂本とは別の模刻本の版木だったのか。遺憾ながらその点については不明と言わざるをえない。

最後に刻工の素明こと劉素明について一言したい。『三國志演義』に「呉観明本」とよばれる版本がある。その命名の根拠は巻頭に冠される序の末に見える「長洲文葆光書」建陽呉観明刻」の文字にあった。しかしこれは写刻のこの序を書いた人物が長洲の文葆光であり、その刻工が建陽の呉観明であるといっているに過ぎない。序の刻工である呉観明によりその版本を「呉観明本」とよぶべきではあるまい。とはいえこの本の挿絵に見える「書林劉素明全刻像」の文字を根拠に劉素明本とよぶのもまた適当ではなからう。ここで劉素明に冠されている書林は書肆の意味ではな

く、長洲や建陽と同様劉素明の出身地とみるのが妥当だからである（明代の建陽には書林鎮が存在した）。だから「呉観明本」はしばらくこれまで通り「呉観明本」とよぶしかあるまいが、ア・プリオリに建陽の刊本とみなしてはなるまい。挿絵の形式もそれが建陽の刻本であることを否定している。

ひるがえって劉素明であるが、複数の小説、戯曲の挿絵にその名が見えている。彼は何者なのか。筆者は現在以下のように考えている。すなわち、金陵の複数の書肆と契約し、もっぱらそこに挿絵を提供していた挿絵専門の刻工（ないし刻工集団）であり、それゆえ自らが手がけた挿絵にはそのしるしを残したと。しからは、挿絵に「素明刊」の文字が見えることのみを根拠に、それを『警世通言』の原刻本とみるわけにはゆくまい。ちなみにこの劉素明あたりから、挿絵の速成の要請に応えた、絵柄の相互利用が始まった形跡があるのだが、その点については別の機会に述べることにしたい。

二 建陽書肆の戦略

—『大宋中興通俗演義』をめぐる（その一）—

以下では、白話の長篇歴史演義小説に話題をかえたい。

長篇の歴史演義小説で上図下文でない挿絵を有する現存最古の版本といえ、嘉靖三十一年（一五五二）年に福建・建陽の書肆楊氏清白堂ないし清江堂により刊刻された『新刊大宋演義中興英烈伝』（以下では『大宋中興英烈伝』と称する）であろう（大尾に清江堂の進牌木記があり、巻一巻頭に「清白堂刊行」とある）。『大宋中興英烈伝』の巻頭には二十四葉二十九面の挿絵が冠されているのだが、このうち見開きの二十面については、『会纂宋岳鄂武穆王精忠録』（以下では『精忠録』と称する）の巻頭に冠される「精忠録図」の戦鬪列図を襲ったものであった。

『精忠録』は明の景泰元（一四五〇）年前後に刊刻された原刻本、弘治十四（一五〇一）年の増補本、正徳五（一五一〇）年のその重刻本、李氏朝鮮が正徳重刻本によって刊行した癸酉字本とこれにもとづく戊申字本の存在が知られ、原刻本の残本ならびに癸酉字本、戊申字本が現存している。

癸酉字本は李氏朝鮮第十四代の王宣祖李暉（在位一五六七—一六〇八）により、明の万曆十三（一五八五）年に、戊申字本は第二十一代の王英祖李昖（在位一七二四—一七六）により、清の乾隆三十四（一七六九）年に、それぞれ癸酉の歳（一五七三）、戊申の歳（一六六八）に铸造された銅活字により本文が、巻頭の「精忠録図」や写刻の

序などについては整版で印刷された。戊申字本は、長く宮中では失われていた癸酉字本を英祖が十五歳のおりに「士大夫」の家で発見し、翌一七〇九年に父の肅宗に願ひ出て作成してもらったのち宝文閣に蔵されていた写本にもとづくという。間に写本が介しているが、よくできた写本とみえ、両者の挿絵の絵柄が目立つた相違はない。本文に相違がないのは言うまでもない。

『大宋中興英烈伝』は「精忠録」にもとづき熊大木が創作した小説である。それゆえ『宋史』本伝などの岳飛関連の史籍や詩文などを集め、史部伝記類に著録される『精忠録』とはまったく性格を異にする作品であった。とはいへ、親子の關係にあり、ともに岳飛を称揚することを通じ「愛國心」を高める目的で編纂された書物であったから、両者の間には少なからざる共通点があった。「精忠録図」は「偽詔班師」、すなわち秦檜の偽造した十三通の詔書により岳飛が都に呼び戻される場面で終わっており、岳飛の獄死の場面は描かれない。小説である『大宋中興英烈伝』には一定の結末が必要であり、読者を飽きさせない工夫も必要だったから、岳飛の獄死の場面に替えるべく、「岳飛奉詔班師」の後に六つの挿絵を加えるとともに、これに対応する新たな物語、岳飛が都へ戻る道すがら立ち寄った鎮江の金山寺の住職から以後の運命を予言される、などを付け加

えた。「岳飛登金山寺」以下がそれである。ちなみに『大宋中興英烈伝』前半の、第十八図を除く第二十一図までは朝鮮本の『精忠録』の第二十図までと絵柄が一致する(ただし精粗には雲泥の差がある)。これらがいずれも見開きの図であるのに対し、新刻の図はすべて半葉の図であった。

ところで『大宋中興英烈伝』には同内容で書名を『新刊大宋中興通俗演義』(以下では『大宋中興通俗演義』と称する)とする、周氏万卷楼仁寿堂刊の残本が中国国家図書館に、余氏双峰堂によるその重刻本(ないし覆刻本、以下同様)が内閣文庫と日光輪王寺慈眼堂に蔵されている(孫楷第は万卷楼本を双峰堂本の重刻本とするが、序の署名などに鑑みればこのように理解すべきであろう)。「大宋中興通俗演義」の挿絵も見開きであるが、絵柄は『大宋中興英烈伝』とまったく異なり、なおかつ巻頭ではなく本文中に配されていた。

双峰堂は建陽の書肆で、万卷楼が仁寿堂とも名乗ったように、三台館とも称していた。三台館の主人は余象斗であるが、その三台館がおそらくこの重刻本刊刻からさして間をおかず、「岳王志伝」を別題とする、これと同内容の上図下文本、『新刊按鑑演義全像大宋中興通俗演義』(以下では双峰堂本の『大宋中興通俗演義』と区別するため『岳王

志伝』と称する)』を刊行していた(内閣文庫蔵)。それはなぜか。名義が双峰堂から三台館に替わったことの背景には何があったのか。双峰堂が建陽伝統の上図下文の形式によつてではなく、以後南京刊刻の小説のスタンダードとなる、本文中に見開きの挿絵を配する形式により『大宋中興通俗演義』を重刻したのはなぜか。こうした点につき、以下でいささか考察してみることにした。

按ずるに、熊大木の『大宋中興英烈伝』は、当初の刊行地建陽ではその地の伝統と異なる挿絵の形態ゆえ、再刊の機会を得なかつたと思しい。それが万暦十年代末になつて、経緯は不明ながら金陵の書肆万巻楼仁寿堂の主人周曰校により再刊されることになつた。この新版は「上元王少淮」に依頼した、以前とは異なる、数も格段に多い挿絵を、当時金陵刊刻の戯曲では主流となつた形式(本文中に見開き)で配し、書名も『大宋中興通俗演義』と改めたものであつた。これを知つた双峰堂は、かつて同じ建陽の書肆が刊刻したからこちらが地元だとばかり、その巻一巻頭第三行の「書林 万巻楼 刊行」の万巻楼を双峰堂に替えて重刻した。

それなら、挿絵の形態が異なるにせよ、三台館が双峰堂の『大宋中興通俗演義』からほとんど間を置かずに同内容の別版『岳王志伝』を新刻したのはなぜか。誰しも二重投

資などしたくはあるまい。しからば『大宋中興通俗演義』を重刻した双峰堂の主人が『岳王志伝』を新刻した三台館主人の余象斗と別人であつたか、同じく余象斗だつたにしても、『岳王志伝』を新刻した当時には弟たちに双峰堂を譲つて独立した一家を構えていたのではなかつたか。だがこれと異なる想定も可能かもしれない。それは『大宋中興通俗演義』を重刻したことにより周氏万巻楼と余氏双峰堂との間に何か軋轢がおこり、先の重刻本の印刷を続けることができなくなり、やむなく名義を三台館にかえ、『岳王志伝』として新刻したというものである。

その際考慮に入れる必要があるのが、金陵で周氏万巻楼仁寿堂と提携関係にあつた唐氏世徳堂の刊刻した小説に、『大宋中興通俗演義』と同様、建陽の重刻本が存在するものがあるという事実である。壬辰(万暦二十年)夏端(四月)序刻本『新刻出像官板大字西遊記』の熊雲浜重刻本、万暦二十一年長至(夏至)序刊本『新刊出像補訂参采史鑑南北宋志伝通俗演義題評』の余文台双峰堂刻本がそれである。万暦十九年刻の周曰校乙本を重刻した、いわゆる周曰校丙本(刊年、刊刻地とも不明)がこの隊列に加わる可能性もあろう。さらに、万暦二十一年長至から半年を経ない同年陽月(十月)の序を冠する、『南北宋志伝通俗演義題評』の姉妹編にあたる『新刊出像補訂参采史鑑唐書志伝通俗演

義題評』に建陽の重刻本が現存せず、上図下文の潭陽(建陽)余氏三台館刻本のみが存在するという事実も注目に値する。なお上記の金陵刻本の挿絵は、『西遊記』が無署名、『三国志演義』が王希堯であるが、その他はすべて王少淮であった。

言帰正伝、先に述べた軋轢であるが、筆者は以下のように考えている。すなわち、この軋轢は周氏万卷楼との間にのみならず、唐氏世徳堂との間にも生じていた。否、そもそもそれは金陵の書肆と建陽の書肆との間に普遍的に存在していたものであって、その最も尖鋭な形で現れたものが周氏万卷楼と余氏双峰堂との間のそれであったのかも知れない。ではその軋轢がのつびきならない事態に陥った時期はいつごろだったのか。按ずるに、それは万曆二十一年の長至以降、陽月以前だったのではないか。いずれにせよ刊刻書肆不明の周曰校丙本『三国志演義』、熊雲浜重刻本『西遊記』、余氏双峰堂重刻本『大宋中興通俗演義』などの刊刻時期についてもすべてこれ以前だったことにならう。

ではその軋轢の原因は何だったのか。ここで思い至るのが、江戸時代に三部のあいだで繰り広げられた類版をめぐるあらそいである。金陵刊刻の見開きの挿絵をもつ小説は建陽の書肆にとってそれこそ奇貨であり、垂涎的だったのではなかったか。それゆえ建陽の書肆は金陵の書肆に無

断でその重刻本を刊刻していた。かくて金陵の書肆と建陽の書肆の間に争いがおこり、結果としてそれ以後建陽での重刻本の刊刻は控えられ、既存の版木と在庫は廃棄された(のではなかったか)。ひるがえって建陽版は金陵版の類版というよりはほそのままの重刻本であった。よってその行為がなんらかの了解のもとに行われていた可能性もなしとしまい。この場合、ライセンズ契約による出版が契約更改をめぐつてこじれたのかもしれない。だが根拠のない推測はこれまでとしたい。いずれにせよ、その後建陽の書肆は挿絵を伝統の上図下文形式に戻し、金陵版と異なるよう外貌を改めつつ、内容はそのままに、書名の角書で京板などと称してその内実を仄めかし、序の一部や名義を本来のものから改め、金陵の書肆からの抗議に備えた新版を刊刻することにした。筆者は現在この間の動向をこのように考えている。

三 最古の南京刊刻の見開き挿絵本の小説は何か —『大宋中興通俗演義』をめぐつて(その二)—

『大宋中興通俗演義』八巻の挿絵には「金陵王少淮写」の文字が見える。王少淮は金陵刊刻の複数の歴史演義小説に挿絵を描いていた。先の上元は出身地、金陵は居住地で

あろう。挿絵といへば、『大宋中興通俗演義』の中国国家図書館蔵巻一残本の挿絵八図にはなぜか彩色が施されていた。『大宋中興通俗演義』にはこれと絵柄の一致する彩絵精図三十八葉を収める内府抄彩絵本が中国国家図書館に蔵されている（存卷四至六、八、九）。孫楷第はこれと同様の法人鐸爾孟藏本を見て、嘉靖の内府抄本と判断した（両者が同一の抄本である可能性はあるが詳細は不明²⁰）。この抄本が事実嘉靖のものであるなら、楊湧泉によつて同業者で筆の立つ熊大木のもとに持込まれた、岳飛を主人公とする小説を『精忠録』にもとづき新作するという、『大宋中興英烈伝』刊刻で実を結んだ企画のその後の経緯につき以下のように想定することも可能なのではあるまいか（ちなみに『大宋中興英烈伝』は巻一以外では「大宋中興通俗演義」と題している）。

すなわち『大宋中興英烈伝』の挿絵は『精忠録』の「精忠録図」を流用したいわけではきあいのものであったから、これを宮中のやんごとない方のお目にかけるには不都合があった。それでその際に精抄本とそれに相応しい彩絵精図が制作された。その彩絵精図をもとに王少淮が描いた挿絵、それが『大宋中興通俗演義』の挿絵ではなかったか。『精忠録』の景泰原刊本刊刻の際のパトロン（袁純か）の身分は不明ながら、弘治増補本のそれは太監麦某、正徳重刊本

は太監劉某であった。

ひるがえつて『大宋中興通俗演義』の原刻本の刊刻時期であるが、少なくとも『三国志演義』の周曰校乙本以前、つまり万暦十九年以前であつたらう。『三国志演義』とは異なり、『大宋中興通俗演義』の場合には、絵柄が違つとはいへ見開きの挿絵を冠した先行作品、『大宋中興英烈伝』が存在していたし、その改定版にあたる彩絵精図を附した内府抄本が民間に流出していた可能性もあるからである。

では『三国志演義』の挿絵のない周曰校甲本はいつごろ刊刻されたのか。甲本と乙本の先後については未だに甲論乙駁の状態であるが、多数派は甲本の刊刻時期を乙本以前の万暦十年代の前半に置いている。詳しくは述べないが、挿絵の有無に照らしても当然の結論であらう。論の帰結として、金陵刊刻の小説に見開きの挿絵が組み込まれるようになった時期は万暦十年代前半から十九年の間であつて、その最初の作品は『大宋中興通俗演義』の原刻本であつたということにならう（ともに世徳堂刊の『西遊記』は万暦二十年、『南北両宋志伝題評』は万暦二十一年の刊刻とされる）。

『三国志演義』の主人公は『大宋中興英烈伝』のように岳飛一人というわけではなかった。だから、関羽の生涯を連続した挿絵で示す『関聖帝君聖蹟図誌』のごとき書物は

つとに存在してはいても、それに『精忠録』の「精忠録図」の役割を果たさせることは出来なかつた。そもそも熊大木は先行して全相平話が存在する三国時代以前を対象とする歴史演義小説については、これを編纂する意思を持たなかつたようだ。この点については別稿で詳しく述べたい。

四 李氏朝鮮に持込まれた『三国志演義』の挿絵本

『三国志演義』にはあまたの版本が存在するが、建陽の上図下文形式のものと同清半ば以降の肖像形式以外の挿絵を有するものはさして多くない。周曰校乙本(と丙本)以外では(丙本の挿絵は乙本と大差ないという)、既述の「呉観明本」、遺香堂本、雄飛館英雄譜本、宝翰楼本、李笠翁本などが代表的なものであろう。関寛東によれば、韓国にそうした版本は現存していないらしい。しかし現存していないからといって持込まれなかつたことにはなるまい。では以上の版本のうち、李氏朝鮮に持込まれた可能性があるものはどれか。

ソウルの国立中央図書館に、英祖三十八(一七六二)年以前に李氏朝鮮に持込まれた、小説を中心とする漢籍の挿絵を模写し装丁したと思しい冊子が蔵されている。『支那歴史絵模本』の題箋が貼られたこの冊子(以後はこれを影

印し解説を附して刊行した朴在淵により、「中国小説絵模本」とよぶ)については、『西遊記』と『水滸伝』の挿絵を中心に別稿でやや詳しく述べたが、紙幅の関係で『三国志演義』については割愛せざるをえなかつた。そこでこの場を借り、そこに収められている『三国志演義』の絵模本八図につき、いささか論じてみたい。

結論を先に述べれば、八図すべてに「李卓吾先生批評三国志真本」(以後は「真本」と略称する)に対応する挿絵が存在しているから、李氏朝鮮に持込まれ、「中国小説絵模本」の原拠となつた(可能性の高い)『三国志演義』は「真本」だということになる。ただし『西遊記』や『水滸伝』による絵模本に比し、原挿絵との絵柄の相違が大きい点がいささか気になる。以下に、別稿に掲げた、赤壁の闘いとその前哨戦にあたる、孔明が霧に紛れ魏軍から一夜にして十萬本の矢をせしめる場面の絵模本―「諸葛亮計伏周瑜」ならびに「周公瑾赤壁鏖兵」と題される―を例に、その具体的な状況を見てゆくことにしたい。だが、それについては先んじて「真本」の版本について論じておく必要がある。

筆者が「真本」と略称する『三国志演義』は、巻首題を「李卓吾先生批評三国志真本」とする『三国志演義』の版本すべてである。しかく汎称するゆえんは、それが同一ま

たは酷似する（覆刻または重刻、後修の）版本により、複数の書肆から刊行されているからである。すなわち、封面に「李卓吾先生評／新刊三国志／呉郡宝翰楼」とある宝翰楼本（台湾大学蔵本）、「李卓吾先生評次／三国志／繡繪全像 金閻大業堂蔵板」とある大業堂蔵板本（京都大学蔵本）、ならびに封面を欠き、この両者と第一回の一葉二面の挿絵を異にする版本がそれである。この三者のうち、封面を欠く第三の版本がこれまで宝翰楼本とされてきた（以後この版本を「宝翰楼本」とよぶ）。「宝翰楼本」とされてきた版本はイェール大学、北京師範大学、京都大学に蔵される三本であるが、イェール大学本は本文のみ、京都大学本は挿絵のみの残本で、本文と挿絵の両者を備える北京師範大学本にしても、序、目などを欠くとされる。この三本、いずれも封面を欠き、本文のどこにも書肆名が見えないというから、いずれも正しくは刊行書肆不明本とすべきであって、挿絵のないイェール大学本には宝翰楼本あるいは大業堂蔵板本と同一の版本である可能性も残されている。にもかかわらずこれら三本が「宝翰楼本」とされたのはなぜか。

宝翰楼本の存在に最初に言及したのは馬廉である。馬廉はこれを瑠璃廠の来薰閣で見かけメモを取った。孫楷第などの宝翰楼本の著録はすべてこれを襲ったものにすぎず、いずれも自身目録調査したものでなかった。前掲の三本

は巻首題が馬廉のいう宝翰楼本と一致したために「宝翰楼本」とみなされたにすぎない。不幸なことに、「宝翰楼本」は挿絵の第一葉が真正の宝翰楼本とは異なっていた。だからそれと異なる挿絵の第一葉を持つ大業堂蔵板本が後修本とされ、その第一葉については後刻葉とされた。ところが、封面に呉郡宝翰楼を明記する「真本」が台湾大学に蔵され、その挿絵第一葉が大業堂蔵板本と同じことがわかった。後修とされた葉にも原刻葉である可能性がでてきた以上、先の推定をそのまま受け入れるわけにはゆくまい。では宝翰楼本と大業堂蔵板本、刊行書肆不明の前掲三本（とりあえずこれまで通り「宝翰楼本」とよんでおく）の關係についてはどのように考えるべきなのか。

上原究一は京都大学の「宝翰楼本」の挿絵を「金閻大業堂蔵板本」と同版先刷りで、第一葉は両者異版」とし、金閻大業堂蔵板本をこれの後修本と述べ、梁蘊嫻の京都大学蔵の「宝翰楼本」と北京師範大学図書館蔵の「宝翰楼本」を完全に同版とする指摘、「真本」を概ね崇禎刊本であろうとする推定を踏まえ、大業堂蔵板本を「清初」の後修と見ておけば大過あるまい」とする。この説が正しいとすれば、大業堂蔵板本と第一葉の挿絵を同じくする宝翰楼本も同じ時期の後修本の可能性が強いということになる。

明末清初の時期は書肆間の版木の継承が盛んであった。

他書肆が刊刻した版木を入手した別の書肆が、自身の書肆名を記した封面のみ新刻し、自家の新刊を装い発兌するなど日常茶飯事であった。この場合にあって、蔵板(版)ないし発兌をそこに明記する書肆はむしろ少数派であった(しかも封面は失われやすかった)。ただそうした書籍でも、本文巻頭などに版木を制作した書肆名が刻されていたり、それを埋木改刻ないし削消した跡があったりして、原刻本刊刻書肆まではわからなくとも、後修本であることはわかるというケースが多いのであるが、「真本」にはそうした手懸りさえ残されていなかった。

台湾大学の宝翰楼本を目撃調査した笠井直美は、その挿絵を京都大学の「宝翰楼本」と比較して、第二葉以下につき「似乎同版(也有可能覆刻、這很難断定)」とし、刷印の先後には言及しない。笠井によれば、呉郡宝翰楼は「他の書肆の刊刻した版木を入手し封面をつけて印行する、といった手法をかなりおおっぴらにとっていた」と推測される書肆であるから、「宝翰楼本」のみならず、同じ蘇州の大業堂蔵板本が宝翰楼本に先行する可能性もあろう。なんにせよ宝翰楼と大業堂が同じ穴の貉である可能性は否定できまい。してみれば「真本」の原刻本刊刻書肆については不明とするのが妥当であろう。結局異なる第一回の挿絵一葉二面のいずれが後刻葉かが重要な判断材料とならうが、

「真本」の本文ならびに挿絵全般にわたる厳密な比較対照をしていない筆者にはこの問題をこれ以上論ずることはできない(ちなみに『三国志演義』第一回の挿絵に対応する絵模本は『中国小説絵模本』には存在していない)。そこで、傍目八目を期し、「真本」が宝翰楼、大業堂を含む複数の書肆による合資出版物であり、後修本まで刊刻されるほど世上に流布していたのではないかとの臆測を披露し、とりあえずの先の疑問に対する筆者の答えとしておきたい。

言歸正伝、「真本」の挿絵と絵模本の類似は明らかであるが、全般に絵模本の絵柄の方が詳密と言える。「諸葛亮計伏周瑜」の場合、絵模本の上部にあたかも雲の上にいるかのごとき一群の兵士とその射かける矢が多数描かれているのだが、「真本」にはそれがなかった。「周公瑾赤壁鏖兵」の場合、両者の構図は類似しているが、左右が逆になっている。だが「真本」の場合に限らず、絵模本が原挿絵の左右を逆にする例は少なくなかった。

ここで呉郡宝翰楼と金閭大業堂について改めて考えてみたい。呉郡、金閭はともに蘇州を指している。第一冊の巻頭に半葉の挿絵を集める形式は蘇杭の版本の特徴であったし、「真本」の挿絵の画風は万曆四十七年武林藏珠館(舒載陽)刊の『新刊徐文長先生評唐演義』や本衙蔵板の『新刊徐文長先生批評隋唐演義』のそれに類する。宝翰楼や大

業堂が原刻本の刊刻書肆でなかったとしても、それが蘇州（または杭州）の刻本である可能性は高からう。明の崇禎年間の呉郡に宝翰楼なる書肆が存在したことは、呉郡宝翰楼刊本の『今古奇観』の現存により明らかであるが、それが万曆末にすでに出版活動をしていたかは定かでない。次に大業堂であるが、周曰校の同族の後輩が経営する金陵の大業堂が有名で、唐氏世徳堂の歴史演義小説の版本によつた後修本を万曆四十年代以降に印行してことが知られる。ならば「真本」の金閻大業堂蔵板本の挿絵に、それが本来唐氏世徳堂の『三國志演義』の挿絵であつた可能性はあるのか。

金閻大業堂（ならびに三呉大業堂）については、近頃上原究一により金陵の大業堂主人如山周文煒の同母弟にあたる如泉周文耀かその子や孫の営む書肆であつた可能性が提起されている。それによれば、周文耀が蘇州で出版活動を行つていたのは確かなようだが、その書肆としての活動時期、蘇州への移住時期は現時点では不明という。しかし、周文耀は『万巻楼名義』での刻書を行つていた²³というから、唐氏世徳堂（あるいは周氏万巻楼）から金陵大業堂を通じて金閻大業堂に至る版本ないし版權移譲の関係が存在した可能性は考えられよう。「真本」の挿絵は見開きではなく、半葉一面であつたが、後世の『西遊記』の挿絵が世徳堂本

の見開きの挿絵を半葉に改めて収める事例も存する。『三國志演義』に周曰校二本と異なる挿絵を持つ世徳堂本があり、それが「真本」の挿絵の原拠となつた可能性は考えられまいか。今後の版本調査の進展により、この可能性の有無が明らかになることを期待したい。ちなみに「真本」の挿絵の画風は『大宋中興通俗演義』より『大宋演義中興英烈伝』すなわち『精忠録』の「戦闘列図」に近いものであつた。

五 世徳堂から大業堂へ

既述のごとく、大業堂は金閻のみならず金陵にもあつた。否、むしろ金陵の大業堂の方がよく知られていよう。そこで再度以下で金陵の大業堂について論じてみたい。金陵の周氏大業堂は複数の歴史演義小説を刊刻している。まず、いずれも無図の、万曆壬子（四十年）の叙を冠する『重刻西漢通俗演義』（周希旦大業堂刊、□（醉）耕堂蔵板）、ならびに『重刻京本増評東漢十二帝通俗演義』（大業堂刊、本街蔵板）が挙げられる。これらについては、重刻、重訂と角書し無図であることに鑑み、万曆十年代以前に刊刻されていたいずれかの書肆の旧板をもとに、万曆四十年以降に重刻された（ものを、その版木を譲り受けた別の書肆が

印行した)ものとみたい。ちなみに上原究一は敬素周希旦が対峰周曰校の同世代であり、「共に仁寿堂を名乗って刻書を行っている」ことを指摘したうえで、「重刻西漢通俗演義」の「大業堂重校梓」の封面は周文煒に版木が渡って以降に附されたに過ぎないとし、周希旦を大業堂主人とは認めない。結句西漢を舞台とする歴史演義小説については、世徳堂ないし万巻楼による見開き挿絵本は作られず、劍嘯閣批評本に直接取って代わられたとみてよからう。おそらく熊大木による嘉靖定本が作られなかったことと関わりがある。

金陵の周氏大業堂刊刻の歴史演義小説として次に挙げるべきは、いずれも本文中に見開きの図を配し、先行する唐氏世徳堂本の版木によって印行した『(新鏤重訂出像註釈)西晋志伝通俗演義題評』と『(新鏤重訂出像註釈)通俗演義東晋志伝題評』(以下では両者をあわせて『両晋志伝題評』と称する)、ならびに『(新刊出像補訂參采史鑑)唐書志伝通俗演義題評』であろう。後者の『唐書志伝通俗演義題評』は嘉靖三十二年に楊氏清江堂が刊行した無図の『新刊參采史鑑』唐書志伝通俗演義』の存在により、とりわけ注目される。『大宋中興英烈伝』と同様熊大木の作であって、『大宋中興英烈伝』刊行の翌年、同じ楊氏の清江堂から刊刻されたにもかかわらず、『唐書志伝通俗演義』には挿絵がな

かったからである。おそらく『三国志演義』の場合と同様、依拠すべき既存の挿絵が存在しなかったからであろう。

『唐書志伝通俗演義題評』は、『唐書志伝通俗演義』になり、この書のために書かれたとされる癸巳(万曆二十一年)陽月の序を冠する分節本で、王少淮の署名のある挿絵を本文中に配していた。『両晋志伝題評』は刊刻時期不明の分節本で、やはり王少淮の挿絵を備えていた。「題評」を銘打つ歴史演義小説としては、同じ唐氏世徳堂から刊刻された、癸巳長至の序を冠し、王少淮の挿絵を配する分節本の『(新刊出像補訂參采史鑑)南北宋志伝通俗演義題評』があった。以上三種の世徳堂本にはいずれも陳氏尺蠖齋の評釈が附されている(題評と称されるゆえんである)。この陳氏尺蠖齋が世徳堂本『西遊記』の壬辰(万曆二十年)夏端四日付の序で、世徳堂主人の唐光録から序を依頼されたと述べている秣陵陳元之であるなら、世徳堂は『西遊記』の序に引き続き陳元之に歴史演義小説の題評三種を依頼し、それを一気に刊刻したことになる。万曆二十年から二十一年にかけては世徳堂の活動の全盛期だったようだ。だがそんな世徳堂にもやがて出版業から撤退する日がやってきた。かくてそれまで刊刻してきた小説の版木は周氏の大業堂に移ることになった。ではその時期はいつごろか。

上原究一は、唐氏世徳堂は嘉靖末ないし隆慶年間に唐廷

仁が創業し、万曆二十五年から二十七年までの間に唐晟・唐泉ら兄弟に代替わりし、天啓年間頃にこの兄弟が活動を終えるときにも出版業を離れたろうという。世徳堂から大業堂への版木の移譲時期についてはその頃にしても、大業堂による版木の蒐集事業については、『西漢通俗演義』の叙の存在を念頭に、万曆四十年頃までその開始時期を遡らせることは可能であるかもしれない。

おわりに

筆者は二〇一一年の第十回に続き、二〇一三年の第十二回にも「中国古代小説、戯曲暨数字化国際研討会」に参加した。この研討会は首都師範大学の周文業氏が二十一世紀の開幕を告げる二〇〇一年以来ほぼ毎年開催しているもので、小規模ながら現在中国で開催される、最も活発かつ自身の濃い研討会のひとつといえる。

数字化を銘打つ以上、この研討会において新たなソフトや周辺機器の紹介をテーマとする研究発表がなされるのは当然であるが、それがこの研討会開催の主旨というわけではなく、版本研究、さらにいえば周氏の開発したソフトを用いた版本研究の実践例の発表の場として役割を果たしている。とはいえベテランの版本研究者の報告のなかには周

氏のソフトを（少なくとも積極的には）用いず、従来からの手法によったと思われるものもなくはない。だがそうした発表が拒否されている様子はない。パソコンを用いての版本研究が進展し、ベテラン研究者もその存在を無視しえなくなつた結果、呉越同舟ではないが、新旧それぞれの手法による版本研究が仲良く同居しているのであろう。

かつて版本研究は若年の研究者にとつては敷居の高いものであった。だが近年そうした大家の老齢化が進む一方、大学や図書館に秘蔵、死蔵されてきた貴重な文献がWEBで公開されるようになって、様相が変わつてきた。むしろ若い研究者に有利な研究分野に変化したのである。残念ながら日本若くは一部の者しかその点に気づいていないようである。中国の研究者はすでにかんがりの者がこの分野の研究に進出しており、新たな研究の地平を切り拓きつつあるようにみえる。ただし戯曲・小説に附される挿絵を通しての版本研究についてはいまだしの感がある。そこで以下でこの点につき多少紹介しておきたい。

二〇一一年度の数字化研討会における挿絵関係の発表は、かくいう筆者の「歴史演義小説圖像的淵源」と顔彦の「上図下文式挿図本《三国志演義》図文相異現象考論」の二つだけであったが、二〇一三年度には顔彦の「從挿図看《三国志演義》版本的類型和演變」、張玉梅・錢海鵬の「明

代《三国演義》挿図対文本曹操形象的詮釈」、陸敏・張祝平の「評林本《水滸伝》挿図対『女禍』思想的闡釈」、張祝平の「《西遊記》世徳堂本与李評本挿図対文本闡釈的比較」、易静・張祝平の「容本、凌本《琵琶記》挿図対文本闡釈的異与同」、李慧・張祝平「《二刻英雄譜》図譜研究的幾個問題」の五つとなった。だが、国家図書館博士後工作站のPDである顔彦氏の研究以外はすべて共同研究であつて、江蘇南通大学文学院の修士論文または博士論文であるらしい。共同研究者となつている同大学の講師銭海鵬氏と教授張祝平氏は彼らの指導教員であろう。しからば中国にあつても挿絵研究に目をつけている研究者はいまだ寥寥たるものであるかもしれない。筆者としては拙文が引玉の磚となり、日本のこの分野の研究者が増えることを切に願つている。

注

- (1) 以上に述べた、「警世通言」の版本の系統については、拙論「『警世通言』版本新考」(埼玉大学大学院文化科学研究科博士課程紀要「日本アジア研究」第九号所収、二〇一二年三月)を参照されたい。
- (2) 以上に述べた、兼善堂本と佐伯文庫本の間における挿絵

の相違については、拙論「警世通言の版本について—佐伯文庫本と都立中央図書館本を中心に—」(『中国—社会と文化』第一号所収、一九八六年六月)をも参照されたい。なおこの拙論と続篇「警世通言の版本について(補)」(『中国古典小説研究動態』創刊号所収、一九八七年十月)で論じた「警世通言」の版本の系統に関する見解については、注1の拙論で修正している。

- (3) 以上に述べた、劉素明と呉観明についての見解については、拙論「四統研究前後」(『中国古典小説研究』第五号所収、一九九九年十二月)の「1 呉観明は刻工である」と「2 劉素明はなにものか」をあわせ参照されたい。

- (4) 安徽省図書館所蔵の景泰原刻本残本に関する情報を福建師範大学の涂秀虹教授からいただいた(安徽省圖書館古籍部の石梅女士の示教によるという)。記して感謝の意を表するとともに、そこに記される情報の一部を以下に記しておきたい。この袁純輯本は「図一卷缺1、5、6、9、12、13、17、31図。現存二十五幅図(包括一幅半葉殘図)為一葉全幅大図。与朝鮮刊本文上下図版式不同。且現存図像与朝鮮刊本完全不同」であるという。朝鮮本の上上下文図の版式と同じでなく、しかもその図像が「完全不同」とはどういうことか、興味は尽きない。可及的速やかに景泰原刻本の挿絵を調査したいものである。

- (5) 以上に述べた、李氏朝鮮刊行の二つの「精忠録」、ならびにそれらと「大宋中興英烈伝」の挿絵の關係については、拙論「歴史演義小説の図像の淵源」(『埼玉大学紀要 教養

学部」第四十七卷第二号所収、二〇二二年三月）ならびに「岳飛をめぐる通俗小説の挿画」（『中国古典文学挿画集成・第八集 小説集（二）』所収、遊子館、二〇二二年六月）を参照されたい。

(6) 台北の中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館に周氏万卷樓刊本の『大宋中興通俗演義』の巻九、十に相当する「附会纂大宋鄂岳武穆王精忠録」が蔵されているとの情報を上原究一氏からいただいた。記して感謝の意を表したい。詳細はいずれ上原氏が専論を執筆されよう。

(7) 双峰堂、三台館、余象斗の關係については、磯部彰「閩齋堂刊『新刻増補批評金像西遊記』の版本」（『東北アジア研究センター叢書』第十九号所収、東北アジア研究センター、二〇〇六年）ならびに上原究一「金陵書坊周曰校万卷樓仁壽堂と周氏大業堂の關係について」（『斯道文庫論集』第四十八輯所収、二〇一四年二月）による。

(8) 以上の点については、上原究一「唐氏世徳堂と周氏万卷樓仁壽堂の章回小説刊行の覆刻及び後印の事例について」（『中国古典小説研究』第十六号所収、二〇一一年十二月）を参照されたい。

(9) 「南北宋志伝通俗演義題評」と「唐書志伝通俗演義題評」については、上原究一「金陵唐氏世徳堂刊本講史小説三種と上元王氏の双面連式挿画について」（『中国古典文学挿画集成・第九集 小説集（三）』所収、遊子館、二〇一四年一月）を参照されたい。

(10) 以上の点については、拙論「嘉靖定本から万曆新本へ—

熊大木と英烈・忠義を端緒として—」（『東洋文化研究所紀要』第一二四冊所収、一九九四年三月）を参照されたい。

(11) 筆者の「嘉靖定本から万曆新本へ—熊大木と英烈・忠義を端緒として—」ではこれと異なる推論を述べたが、現在はこのように考えている。

(12) 『中国古典小説史料叢考 韓国篇』（서울·아세아문화사、二〇〇一年一月）などによる。

(13) 拙論「中国小説絵模本」に見る中国小説の挿絵（『アジア遊学』二〇一四年二月号所収）。ただしこの拙論にはいくつかの不十分な点がある。「中国小説絵模本」に序と小叙を書いた完山李氏を英祖の娘の和緩翁主またはその姉妹のいずれかとした点と、「中国小説絵模本」がもついた『水滸伝』の版本を容与堂の「李卓吾先生批評忠義水滸伝」と遺香堂の「忠義水滸伝」と特定したことである。前者については、李氏の氏に引かれて女性と思ひ込んだためであるが、和緩翁主の実兄莊献世子をその候補に挙げるべきであった。後者については、それぞれの『水滸伝』に覆刻の挿絵をもった版本があることを失念していた。したがって『水滸伝』の李氏朝鮮に持込まれた可能性のある版本の範囲は広がることになる。以上上原究一氏の示教による。

(14) 『三国志演義』の「宝翰楼本」については、梁繼嫻「李卓吾先生批評三国志真本」（宝翰楼本）の挿絵について—合戦場面の表現を中心に—」（『中国古典文学挿画集成・第六集 全相平話五種／三国志演義（宝翰楼本）』所収、遊

子館、二〇〇九年一月)を参照されたい。なお梁蘊嫻の「模倣と創造『繪本三國志』における『三國志演義』遺香堂本の受容—合戦場面を中心に—」(『日中藝術研究』第三八号所収、二〇一二年十二月)は、『三國志演義』の挿絵において遺香堂本の挿絵が「異色な存在」であることを強調し、「宝翰楼本」を含む「五種刊本」の挿絵には共通した特徴がみられる」とするが、これは矛盾しており正しくない。

(15) 「旧本三國演義板本の調査 截至民国十八年四月止」(劉情編『馬隅卿小説戲曲論集』所収、中華書局、二〇〇六年八月。初出は『北平北海圖書館月刊』第二卷第五号、一九二九年十月)に見える。なお同書所収で、馬廉の民国十六年の日記「隅卿雜鈔」から編集された「三國演義版本六種」にも同様な記述が見える。

(16) 笠井直美「呉郡宝翰樓書目」(『東洋文化研究所紀要』第一六四冊所収、二〇一三年十二月)による。笠井には別に台北の中央研究院歴史語言研究所で二〇一二年九月二十五日に発表した講演原稿「呉郡宝翰樓初探」があり、そこですでに台湾大学所蔵の宝翰樓本の「真本」について論じている。公刊に先立ちその講演原稿を恵投された笠井直美氏に感謝の意を表したい。

(17) 上原究一「金陵書坊周曰校万卷楼仁寿堂と周氏大業堂の關係について」による。

(18) 笠井直美「呉郡宝翰樓初探」による。「呉郡宝翰樓書目」でも同様に論ずる。

(19) 笠井直美「北京大学図書館蔵『忠義水滸全伝』—「万曆袁無涯原刊」情報の一人歩き—」(『名古屋大学 中国語学文学論集』第二二輯所収、二〇〇九年十二月)の注10による。同様の見解は「呉郡宝翰樓初探」ならびに「呉郡宝翰樓書目」でも述べられている。

(20) 笠井直美の「呉郡宝翰樓書目」ならびに「呉郡宝翰樓初探」によれば、複数の宝翰樓刊行の序跋に万曆の年号が見えるが、宝翰樓の出版活動からみて、その年に宝翰樓が存在していたと断ずることはできないという。うべなうべき見解であろう。

(21) 上原究一「金陵唐氏世德堂刊本講史小説三種と上元王氏の双面連式挿画について」などを参照されたい。

(22) 上原究一「金陵書坊周曰校万卷楼仁寿堂と周氏大業堂の關係について」を参照されたい。

(23) 上原究一「金陵書坊周曰校万卷楼仁寿堂と周氏大業堂の關係について」による。

(24) 上原究一「李卓吾先生批評西遊記」の版本について」(『日本中国学会報』第六三集所収、二〇一一年十月)を参照されたい。

(25) 上原究一「金陵書坊周曰校万卷楼仁寿堂と周氏大業堂の關係について」を参照されたい。

(26) 拙論「嘉靖定本から万曆新本へ—熊大木と英烈・忠義を端緒として—」を参照されたい。

(27) 上原究一「金陵書坊唐氏世德堂主人考—二人の「唐光祿」—」(『中国—社会と文化』第二七号所収、二〇一二年七月)

を参照されたい。

(28) 上原究一「金陵書坊唐氏世徳堂主人考——二人の「唐光祿」による。」